

1972年、私は『なぜなのママ？

—3歳からの性教育絵本—」を出版しました。やなせたかしさんのすてきな絵で、裸のパパとママが手をつないでスキップしています。すると、女の子と男の子が大きな声で聞きます。「私と僕は、どこにいたの?」「お母さんのお腹の中の、砂粒より、もっと小さな、赤ちゃんのもと、卵子だったの。でも卵子だけでは、赤ちゃんとはいけません」といった調子。この絵本に日本中は大騒ぎになりました。「ついに出了!『性の絵本』—童画風に大胆に—」。これは、ある全国紙の見出しで、他紙も賛否両論。百貨店では、この絵本の棚が過激だとする人物からひっきり返される事件まで起きました。

しかし、北欧の絵本では当時、こんな表現は当たり前でした。デンマークの絵本「あかちゃんはどうしてできる」(71年刊)は、「お父さんとお母さんが性交をすると、精子はお母さんの膈を泳いでいって、卵子を見つけて入り込むんだ」。スウェーデンの絵本「イーダとペールとミニムン」(77年刊)は、「パパのペニスは、

北欧の教育絵本 —いのちの始まり 明確に表現—

ママのヴァギナに入る。抱き合っ
て一緒にいる”ことを性交って言うんだ。こうしてママとパパは赤ちゃんを作ったのさ」と、はっきりと科学的に書かれています。

北欧の個を尊重する文化と、日本の空気を読むことに腐心する文化の違いか?日本ではその後、性教育の絵本はだんだん出版されなくなり、家庭での性教育で困っている親が大勢います。小学校の性教育も、殆どうわべだけ。マンガやテレビ、ネットによる性の情報に影響されやすい児童をどう導くか、先生たちは難しい判断を、日々迫られているのです。



きたざわきょうこ・さく やなせたかし・え
1972年 アー二出版刊



1971年 デンマーク・ボルゲン出版刊
1982年 アー二出版刊